

書いて覚える

国立病院機構

桐野 高明

IRYO Vol. 69 No. 1 (3) 2015

新年あけましておめでとうございます。機関誌「医療」は今年で69巻となります。昭和20年の12月に国立病院・国立療養所が創設されて以来、昭和21年から間断なく出版され続けてきた機関誌です。今後も国立病院機構をはじめとする国立医療学会所属のあらゆる職種の皆さんが、研究発表をする場として大切に維持していただければ大変ありがたいと思います。

人は何事かに習熟したいと願う場合には、先人の教えを聞いて学ぶ場合もあり、書かれた書籍を読んで覚えるということもあります。それよりも、自分が習得したことを他に人たちに教えるときに最も習熟度が上がるという場合もあるでしょう。自分自身のことを振り返って考えてみると、個人的には何か自分が学んだことを自分の頭の中で整理して、それを書く作業をするときに、一番頭に入ったような気がしていました。これまで、自分としては物事を系統的に理解してそれを深く分かるためには、そのことについて書くことが一番よいと思ってきたのです。ある時、このことについて経営学者のドラッカーが大変興味深いことを書いているのを読む機会がありました（Harvard Business Review, June, 2010）。彼の目から見ると、個々人の得意とする仕事には大きな違いがあり、特に知的労働をする人たちにとって、自分が得意とする仕事の仕方を自覚することが非常に重要だと言うのです。その中でも、物を学ぶのに自分は読んで学ぶのか、聞いて学ぶのかを知ることが重要で、学び方に唯一の正しい方法があるわけで

はないことを理解することが大事だと言うのです。例えば、読んで仕事をするタイプの人物が、ブリーフィングを聞くだけで仕事をするようになると、全く以前と違って精彩を欠くことになる例として、第二次世界大戦のヨーロッパ連合軍最高司令官を務め、後に合衆国大統領となったアイゼンハワーの例を挙げています。そして更に、聞いても読んで上手に学べない人もいることを知ることも重要で、世界の一流の著述家はこのタイプが少なくないのだそうです。彼らは読んだり聞いたりするやり方ではなく、自分で書いて学ぶからです。極端な場合、書いて学ばなければ学べないような人もいます。イギリスの首相を務めたチャーチルは著述家としても有名でしたが、彼は学校で聞いたり読んだりして勉強することは苦手で、従って成績も振るわず、退屈な学生生活を送ったようです。しかし、チャーチルの知的能力の高さを疑う人はいないでしょう。

そうか、自分はどちらかと言うと書いて学ぶ方だったのか、と思ったのはその時です。書いて学ぶこと、書いたものを残すことはとても重要です。短いものであっても、論文にして自分で書くことは、このようにより深く物事を理解し、次に飛躍する大きな力となります。話を聞き、説明を読んだだけで、たちどころに学んでしまう人にとっても、このことは重要です。多くのNHOメンバーの皆さんが機関誌「医療」により論文を投稿していただくように、心より期待しています。